

NEWSLETTER

No.16

2006年11月15日

会長 澤田治美 事務局 〒594-1198大阪府和泉市まなび野1-1桃山学院大学 林 宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202 psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp(林 宅男 URL: <http://www.soc.nil.ac.jp/psj4>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会Newsletter第16号をお届けします。さる9月16日に、第31回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 副会長挨拶

「文法ショーヴィニズムの語用論研究を問い直す」
山梨正明

言葉は、日常生活におけるコミュニケーションの重要な手段です。しかし、言葉が、コミュニケーションのための唯一の手段であるわけではありません。コミュニケーションのプロセスには、言語的な伝達にかかわる要因と非言語的な伝達にかかわる要因が密接にかかわっています。一般に、コミュニケーションのメカニズムを問題にしていく場合には、この点を考慮し、言語的な要因と非言語的な要因を領域固有的に限定して規定していくモジュラー・アプローチの研究が試みられます。モジュラー・アプローチに基づくコミュニケーションの研究では、言葉のメカニズムにかかわる文法的な知識に関係する能力（すなわち文法能力）を言語外の知識にかかわる運用能力や一般的な認知能力から独立した自律的な知識の体系とみなし、この体系の存在を前提としてコミュニケーションの研究が進められています。

しかし、この線にそったコミュニケーションの研究が前提とする文法能力の自律性は、言葉をふくむ伝達活動を根源的に支配している人間の一般的な認知能力と運用

能力の観点から問い直していく必要があります。一見したところ、自律的な知識の体系として安定しているようにみえる文法能力は、言語使用の文脈や歴史的な言語変化の文脈においてゆらいでおり、言語的な知識として安定する以前の根源的なコミュニケーションの場から派生してきています。日常言語の伝達を可能とするコミュニケーションのメカニズムを明らかにしていくためには、文法的知識の自律性を前提とする語用論の研究をこえる新たな視点、すなわち、文法能力の発現を可能とする一般的な認知能力と運用能力のダイナミズムに注目する新しい言語学と関連分野の視点から捉え直していく必要があります。

言葉は、われわれが具体的な環境のなか身に身をおき、環境との相互作用による身体的な経験を動機づけとして獲得してきた伝達的手段です。言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる一般的な認知能力と運用能力がさまざまな形で反映されています。生物の延長としての人間が長い進化の過程を経て獲得するにいたった言葉の世界は、根源的に感性、身体性を反映する一般的な認知能力と運用能力によって動機づけられています

日常言語は、マイクロレベルからマクロレベルにいたるどのような要素であれ、主体と外部世界、主体と他者との相互作用の反映として規定されます。外部世界の対象や事態は、主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点、主体と外部世界との相互作用（な

いしは主体と他者との相互作用)との関連でさまざまな意味づけがなされます。また、外部世界の理解には、具体的な解釈のレベルからより抽象的な解釈レベル(あるいは、特定の解釈のレベルからより一般的な解釈のレベル)に至るさまざまな主体の主観的な認知プロセスがかかわっています。

語用論をふくむこれまでの言語学の研究は、ともすれば文法ショーヴィニズム(ないしは、シンタクス・ショーヴィニズム)を背景とする語法的研究、あるいは言語的知識の自律性を暗黙の前提とするモジュラー・アプローチに基づく言語研究に傾きがちです。語用論の研究、コミュニケーションの研究をより実証的で、包括的な研究として推進していくためには、語法的な視点と文法ショーヴィニズムの視点をこえる新たな視点、すなわち、文法能力の発現を可能とする一般的な認知能力と運用能力のダイナミズムに注目する新しい言語学の視点から捉え直していく必要があります。次の「語用論的転回」(プラグマティック・ターン)は、ここから始まります!

事務局より

★ 第9回大会ご案内

日本語用論学会第9回大会は、2006年12月9日(土) 桃山学院大学 〒594-1158 大阪府和泉市まなび野1-1 TEL: 0725-54-3131 (代) URL: <http://www.andrew.ac.jp> で別紙のプログラムの要領で開催されます。

今年度は、午前中にワークショップが5部屋で19件、午後から研究発表が5部屋で20件と午後3時45分からは二つの講演が予定されています。また、午前中と昼休みにかけては、8件のポスター発表が組まれています。大会発表応募総数は合計51件で、特に研究発表には38件で、多くの応募がありました昨年度(32件)を上回る結果になりました。詳しくは、同封のプログラムをご覧ください。

【受付について】現会員、新入会員、当日会員すべて、受付表にお名前、ご所属などをお書きいただき、下記の要領で会費及び

参加費をお納め下さい。

【会費】

・現会員:(会費未納者のみ) 一般会員 5,000円、学生会員 4,000円 団体会員 6,000円
・新入会員:同上
・当日会員:一般会員・団体会員:3,000円
学生:2,000円

【参加費(大会資料代)】

・大会に参加される方は、受付で参加費1,500円(『予稿集2006』(アブストラクト集)代と『第8回大会発表論文集』代(去年の大会のプロシーディング)を含む)をご購入下さい。なお、今年からハンドアウトは各会場で発表者が配る方式になっております。
・午前中のワークショップから来られる方は10時前後の受付が一番混雑しますので、お早めにお越し下さい。受付は9時から開けております。

【懇親会】

・会費:4,000円。
・会場:聖マーガレット館2階(大学構内)

【当日の昼食】大学の食堂が3箇所で使用できます。同封のプログラム並びにキャンパスマップをご覧ください。なお、お弁当は手配しておりませんのでご注意下さい。

【ホテルの紹介】学会ではホテルの紹介はいたしておりませんのでご了承下さい。

【アクセス】桃山学院大学へのアクセスにつきましては、同封のプログラム、或いは、桃山学院大学のホームページ <http://www.andrew.ac.jp> をご覧ください。

★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、大会当日の事務が大変混雑いたしますので、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙が同封されている方は、

今年度分が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みですので結構です。また、2枚同封されている方は、2005年度と2006年度の会費が未納の方です。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっております。

★『第4回談話会』のお知らせ

第4回「談話会」は、講師に京都大学の山梨正明先生をお招きして、来年(2007年)3月に京都で開催する予定です。春の「談話会」の日程等は、例年、『語用論研究』の送付時にお知らせしておりますのでご確認いただきますようお願いいたします。この会を会員の交流の場としてもご利用いただきたく、皆様のご参加をお待ちしております。

★ 語用論関係の新刊書紹介

沖裕子(2006)『日本語談話論』東京：和泉書院。

国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』東京：くろしお出版。

児玉徳美(2006)『ヒト・ことば・社会(開拓社叢書15)』東京：開拓社。

澤田治美(2006)『モダリティ』東京：開拓社。

高見健一・久野暲(2006)『日本語機能的構文研究(A Functional Approach to Japanese Syntax)』東京：大修館書店。

田中典子(2006)『プラグマティクス・ワークショップ-身のまわりの言葉を語用論的に見る』横浜：春風社。

谷口一美(2006)『認知言語学-学びのエクササイズ』東京：ひつじ書房。

中園篤典(2006)『発話行為的引用論の試み』東京：ひつじ書房。

ミルズ, サラ. 熊谷滋子訳. (2006)『言語学とジェンダー論への問い-丁寧さとはなにか』東京：明石書店。

レカナティ, フランソワ. (2006)『ことばの意味とは何か-字義主義からコンテクスト主義へ』今井邦彦訳. 東京：新曜社。

Alexander, J. C., B. Giesen & J. L. Mast.

(2006) *Social Performance: Symbolic Action, Cultural Pragmatics, and Ritual*. London: Cambridge Univ. Pr.

Benz, A., G. Jäger & R. van Rooij. (eds.)

(2006) *Game Theory and Pragmatics*.

Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Birner, B. J. & G. Ward. (eds.) (2006) *Drawing the Boundaries of Meaning: Neo-Gricean Studies in Pragmatics and Semantics in Honor of Laurence R. Horn*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Buhrig, K. & J. D. Ten Thije. (eds.) (2006) *Beyond Misunderstanding: Linguistic Analyses of Intercultural Communication*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Cruse, A. (2006) *A Glossary of Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Pr.

Fischer, K. (ed.) (2006) *Approaches to Discourse Particles. Vol. 1*. Amsterdam: Elsevier Science.

Flottum, K., T. Dahl & T. Kinn. (2006) *Academic Voices: Across Languages and Disciplines*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Frapolli, M. J. (ed.) (2006) *Saying, Meaning and Referring: Essays on Francois Recanati's Philosophy of Language*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Griffiths, P. (2006) *An Introduction to English Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Pr.

von Heusinger, K. & K. Turner. (eds.) (2006) *Where Semantics Meets Pragmatics*. Amsterdam: Elsevier Science.

Horn, L. R. & G. L. Ward. (eds.) (2006) *The Handbook of Pragmatics. 1st edition*. Malden, Mass.; Oxford: Blackwell.

Huang, Y. (2006) *Pragmatics*. Oxford: OUP.

Locher, M. A. (2006) *Advice Online: Advice-giving in an American Internet Health Column*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Lovik, T. A. (2006) *A Conversational Analysis of German Service Encounters: Applied Contrastive Pragmatics*. Oxford: Peter Lang.

Montreuil, J-P. Y. (2006) *New Perspectives on Romance Linguistics (2-Volume Set): Vol. I. Morphology, Syntax, Semantics, and Pragmatics; Vol. II. Phonetics, Phonology and Dialectology*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

- Nagata, Takashi. (2006) *A Historical Study of Referent Honorifics in Japanese*. Tokyo: Hituzi Shobo.
- Noveck, I. A. & D. Sperber. (eds.) (2006) *Experimental Pragmatics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

★ 学会ニュース

【お喜び】本会会員の金水 敏先生が、第25回新村出賞を受賞されます。贈呈式は、11月26日(日)に京大会館で行われます。対象となった書籍はひつじ書房(刊)2006年2月20日発行の『日本語存在表現の歴史』です。以下に、その要約をお示ししておきます。

〔要約〕

本書は、日本語固有の存在動詞「ある(あり)」「いる(ゐる)」「おる(をり)」の3語を主たる対象とし、その意味、用法等の分布と変遷について、歴史的な検討を加えることを目的とする。そのために、本書は第1部「「いる」と「ある」」および第2部「「いる」と「おる」」の2部構成をとっている。

第1部では、まず現代共通語を中心に、「いる」と「ある」の違いを意味論、統語論の面から分析し、空間的存在文、限量的存在文、所有文、リスト存在文という分類を得た。次に、古代語において変化動詞であった「ゐる」が、「たり」を伴った形式から「いた」を経て室町時代に存在動詞「いる」に至った経過、またその際、「いる」が空間的存在文の意味を獲得したこと、その後、限量的存在文・所有文その他へと広がっていった過程を明らかにした。

第2部では、古代語の「ゐる」と「をり」がアスペクト的意味において対立していたこと、平安時代に新しい形式「ゐたり」が成立し、その結果「をり」が特殊な動詞へと変容したこと、その「をり」の意味と文体との関係等について検討した。さらに、全国共通語の「おる」の機能が、漢文訓読文、武士言葉、上方言葉由来の町人言葉等、異なる経路を経て形成されたことについて述べた。併せて、人を主語とする存在文における「いる」「おる」「ある」の地理的分布と中央語の変遷を照らし合わせ、西日本

では「いる」「おる」について京阪を中心とする周圏分布が形成されていること、東日本では「ゐたり」に起源をもつ「いる」「いだ」等の形式が広く強い勢力を持っていることを確認した。また、「動詞+存在動詞」「動詞+て+存在動詞」という形式によるアスペクト形式が、存在表現の語彙の変化と深い相関関係にあることについて概観した。

本書は、「いる」「おる」「ある」を中心とする存在動詞の歴史を、形態論、意味論、統語論、言語地理学等の面から論じるだけでなく、特に「ござる」「おる」を扱う章では、これらの動詞の使用をめぐる、歴史語用論的な議論を展開している。

【お悔やみ】

去る9月10日午前に、本学会の設立発起人のお一人である神戸市外国語大学名誉教授小西友七先生がご他界なさいました(享年89歳)。ここに、会員の皆様にご報告し先生のご冥福をお祈り申し上げます。

【お断り】 Newsletter 15号でお知らせしましたように、次期大会の特別講演の講師には Hartmut Haberland 氏 (Associate professor, Department of Language and Culture, Roskilde University, Denmark、Journal of Pragmatics の編集委員) を予定していましたが、ご本人のご病気でキャンセルとなりました。事務局では善後策を検討中です。決定次第ホームページ上でお知らせしますので、ご覧ください。

□編集後記

15号より新企画として「学会出版ニュース」欄を設けております。会員の皆さんによるご自身の語用論関係の書籍の紹介記事を募集します。体裁は、15号の「学会出版ニュース欄」を参考にして下さい。振るつての投稿を下記のアドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

psnewsletter2006@yahoo.co.jp

(広報委員長 久保進 記)